

オフホワイトのボディにオレンジと赤のラインを入れた列車が旭川駅に入ってきたとき、一瞬辺りの空気が明るく輝いたように思った。十一月一日のダイヤ改正に伴って、この日北海道にはじめて走った新形国系気動車は、まっ黒のC57が貴婦人になどえられるなら、気品の香る若いプリンスのようだった。

札幌発網走行きの新形気動車ホワイトアロー号は、上川盆地を突き切り、行々手をはばむ山の麓に達すると、急にカーブし、山裾に沿って山あいにもぐり込んでいった。等高線を縫うように線路が敷かれているのを、私は大発見でもしたように感心して眺めた。

鉄道建設の専門家から見れば当然のことを、私がいまさのように興味をもって眺めたのは、明治期の北海道鉄道建設物語を書き、そのなかで何度か「等高線を縫うように」という句句を使ったからである。トンネル掘削技術の未熟な時代、峠越えの鉄道は深谷に沿ってのぼれるところまでのぼり、これ以上登坂が無理と思われるところにトンネルを掘るのだと、取材にうかがった私に、噛んで含めるように話してくださった藤井松太郎元国鉄総裁の言葉が耳染にこびりついている。

その言葉通りに、山の狭間を縫って選定されている線路を目で追いながら、私は、私の作品の主人公である田辺朔郎が、深い原生林に分け入って実地踏査している姿が、あたたか目の前に写し出される

かのような錯覚に陥った。四年前、私は福島の琵琶湖から京都へ琵琶湖疎水を建設した田辺朔郎を主人公にして「京都インクライン物語」を書いた。百二十五万円という、明治十八年当時では破格の大土木工事の主任監督が、わずか二十二歳の若者であったことに惹かれたのだが、明治二十三年疎水完成後、田辺朔郎は東京帝国大学の教授となり、三十四歳のとき、その職を

まで追っていったと言ってもいい。この本ができたあつたら、もう一度現地を訪れてみたいと思っていた。たまたま第九回土木計画学研究会が北見工業大学で開催され、土木学会からお誘いいただいたのを機に、その思いが果たせることになった。

一人住む孤師だった。木の枝に露の葉をかけた天幕暮らしを忘れないよう、自ら天幕三次郎と名乗っていたが、踏査の田辺たちに一夜の宿を提供し、心をこめてもてなした。その縁に因んで、石北線開通に伴い、その地に設けられた停車場は、「天幕」と名付けられた。

た。そう確信できるほど、その道路はひなびっていた。囚人の驚異的過酷な労働で築かれたというその道路のそ、田辺朔郎が馬で辿った道なのだ。そしてその辺りの風景は、九十年前に彼が眺めたものとはほとんど変わっていないのではないかと思ひ及んだとき、私は胸が熱くなるのをおぼえた。北海道

ナスニ千度の日高の山中を、幾日も野営を重ねて分け入り、遂に鉄道通過可能なルートを見出した田辺は、その峠に石狩と十勝を結ぶ唯一のラインという意味で、狩勝峠と名付けた。六月に行つたとき、私は峠の上から十勝平野の大観を一望した。

# いまだ醒めぬ余韻 技師・田辺朔郎に惹かれて



田村 喜子

## 「北海道浪漫鉄道」を書いて

旭川から北見まで、鉄道で、それも明るい時間帯に行つてみたかった。かつて田辺朔郎が中村技手を伴って、馬

ホワイトアロー号は、あつたという間に無人の天幕駅を通過した。車窓からは辛うじて点在する民家が認められたが、田辺朔郎が通つたころは、三次郎のほかには人影もない深い山奥だったのだらう。とくくくくくに細流があつた。あのどろけの小川の脇に大きな木箱を据え、焼石を沈めて、三次郎は田辺らに風呂を供したのだと眺める私の目に、舗装しない二メートル幅くらいの道路が見えた。北見道路だと私は直感した。

「北海道浪漫鉄道」を書くに際して、私は二度狩勝峠を越えた。かつて北海道は一馬から成ると言われたほど、道央と道東のあいだには日高山脈が厳然と立ちはだかつている。その貫通ルートを発見したのも田辺朔郎である。マイ

「北海道浪漫鉄道」など。たむら よしこ 作家、著書は「京都インクライン物語」「京都フランス物語」「北海道浪漫鉄道」など。

捨てて北海道鉄道敷設部の技師となった。北海道開拓に最も急要な鉄道建設に情熱をかけた、ロマンを求めた土木技術者田辺朔郎を、再び主人公にして「北海道浪漫鉄道」を書いたのは、彼の魅力にとりつかれて、京都で別れたはずの恋人を、未練がましく北海道

日記では天幕三次郎との出会いがおもしろい。三次郎は山奥の雁皮葺きの小屋にた

永年勤めてきた私の職場であった国鉄若松機関区がなくなくなり、その跡地には若松市民会館と若松中央公民館ができ

て、華平は最後の部分を読みあげたという。十月、「糞尿譚」を「文学会議」

十一月十三日の父あての手紙は「土と兵隊」にでてくるのとほとんど同じ内容であるが、中ほどには次のような文があった。



火野葦平は明治四十年一月二十五日、若松で生まれた。

このときから、葦平の運命品がすててありましたが、日

### 火野葦平資料室



#### 「天幕駅」の由来

日記では天幕三次郎との出会いがおもしろい。三次郎は山奥の雁皮葺きの小屋にた